

公共日本語教育における日本語教育の専門性を開くことの意味 —官学民連携プロジェクトによる「親子 de 国際交流」—

福村 真紀子*・三代 純平**

(2021 年 11 月 8 日 受理)

The Meaning of Opening up the Door to Professionalism of Teaching Japanese Language in Public Japanese Education: Exchange Event for Parents and Children — Collaborative Project by Local Government, Academia, and Private Sector

Makiko FUKUMURA* and Jumpei MIYO**

(Received November 8, 2021)

抄録

本稿は、親子対象の国際交流イベントを実施する官学民連携プロジェクトの実践研究である。本プロジェクトは、地域の子ども家庭支援センターおよび公民館（【官】）、大学（【学】）、2つの地域日本語教室（【民】）の5者が連携した。本稿では、本プロジェクトに参加した一人の公民館のスタッフに焦点をあて、そのスタッフがプロジェクトを通して得た気づきについて明らかにした。その気づきに対する考察から、公民館のスタッフによる本プロジェクトへの参加にはどのような意味があったのかを検討した。その上で、公共日本語教育における日本語教育の専門性を開くとは何かについて2つの観点から論じた。1つ目は、本プロジェクトを1つのコミュニティと捉え、プロジェクトの担い手それぞれが「ことばの市民」に成長できることが、公共日本語教育の専門性を開くことであるという観点である。2つ目は、コミュニティのメンバーがそれぞれの専門性を生かしながら協働するプロセスで、そのコミュニティの日本語教育の理念と実践が更新され、それぞれの専門性も更新されていくことが、公共日本語教育の専門性を開くことであるという観点である。

【キーワード】 地域日本語教育、国際交流イベント、公共性、協働

1. 背景

本稿では、地域の親子を対象とした国際交流イベント「親子 de 国際交流」の企画と運営のプロ

*茨城大学大学院理工学研究科

**武蔵野美術大学造形学部

セスを、「公共日本語教育」の理念に依って立つ実践と捉え、公共日本語教育における日本語教育の専門性を開くとは何かについて論じる。本稿で論じる公共日本語教育は、細川ほか（2017）に依拠している。細川ほか（2017）は、「日本語教育の世界の専門性を、定められた正解やそれを教授する技術・方法の問題に閉ざしてしまうのではなく、もっと広く誰でもが関わりそれを使い、さらに想像と創造の場の形成の方向へ転換すること」（p.45）の重要性を示し、ことばの教育に公共性の議論が必要であると説く。また、細川（2016）は、言語教育のテクニックやスキルを研ぎ澄ますことを教師が目標とし、そのテクニックやスキルが「閉ざされた専門性」となること、また、その「閉ざされた専門性」を持っていない人たちが日本語教育から排除されていくことを批判する。細川は、日本語教育の専門性¹⁾を専門家が占有することに疑問を呈し、社会に広く開く日本語教育を公共日本語教育だと提言しているが、公共日本語教育の実態については明らかにしていない。

一方で、筆者らは、「親子 de 国際交流」を開催するためのプロジェクトを通して、公共日本語教育を実践として試行してきた。「親子 de 国際交流」は、官学民連携プロジェクトとして、東京都日野市周辺に在住する親子を対象に、2016 年度以降 6 年間にわたり 5 回開催された。2016 ～ 2019 年度は、【官】＝日野市立子ども家庭支援センター（以下、センター）、【学】＝武蔵野美術大学（以下、ムサビ）、【民】＝多文化ひろばあいあい（以下、あいあい）の 3 者の連携により、市営施設において対面で開催された。福村・三代（2021）では、センター、ムサビ、あいあいの 3 者の連携で行った 2018 年度の「親子 de 国際交流」を省察し、官学民連携プロジェクトの意義について検討した。ここでは、日本語教育の専門家のみが采配を振るうのではなく、日本語教育の受け手であった大学生や日本語教育を専門としない行政組織が共にコミュニケーションを学び合う場づくりの担い手となって協働する実践の実態を示した。そして、立場を異にする 3 者だからこそ、イベント開催という目標達成のための共通理解をめざし、コミュニケーションを学び合う公共日本語教育の実践の可能性が見えたことを、官学民連携プロジェクトの意義と捉えた。

2020 年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、プロジェクト自体が中止となった。2021 年度も新型コロナウイルスの感染拡大が危惧されたことから、「親子 de 国際交流」は初めてオンラインで開催されることになった。対面開催は叶わないが、本プロジェクトの持続可能性を高めるため、上記 3 者には、より多くの地域の親子に参加してほしいという思いがあった。そこで、生涯学習²⁾の推進を役割とする日野市中央公民館（以下、公民館）と日野市内で 1992 年から地域日本語教室として活動を続けている日野国際友好クラブ（以下、クラブ）にプロジェクトに加わってもらい、「親子 de 国際交流」がより多くの市民に知られ、市民にとってより身近な存在になるように、プロジェクトの担い手を拡大した。公民館は、「地域住民の日常生活に寄り添い、社会教育＝学びをもってその課題解決を図るという目的を持った施設」（日野市）³⁾であり、地域に暮らす外国人に日本語を教えているクラブの運営を支援している。例えば、クラブの運営資金を管理する、クラブが日本語指導に使う場所を提供する、パーティなどのイベントの企画を手伝う、日本語学習者募集の広報活動を行うなどである。プロジェクトに携わる組織の関係を、図 1 に示す。

本稿では、日本語教育を専門としない公民館に注目し、公民館の担当者である森（仮名）のプロジェクトへの関わりについて考察する。森は、2020 年 3 月に大学を卒業し、同年 4 月に日野市に就職し公民館に配属となった。まず森のプロジェクトへの関わり方について述べ、次に森へのインタビュー調査を通し、外国人住民と頻繁に接することがなく日本語教育という分野に足を踏み入れたことのない森が、本プロジェクトへの関わりから得た大きな気づきについて論じる。その気づきとは、①外国人住民にとっての日本語と日本語教育について、②地域のイベント主催者としての役

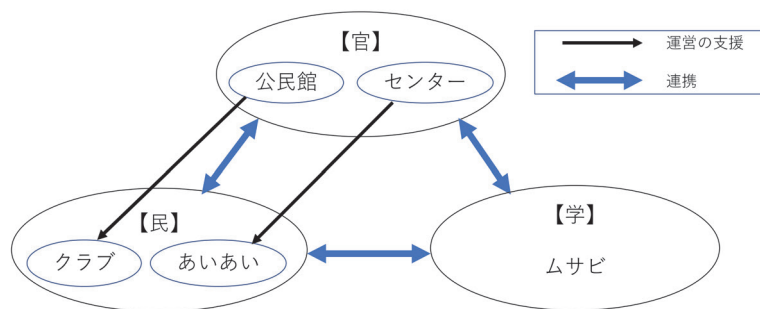


図1 プロジェクトに携わる組織の関係

割について、③生涯学習の提供者としての役割について、の3つである。さらに、これらの3つの気づきから、森が本プロジェクトに参加したことには、どのような意味があったのかを検討する。最後に、森の気づきをもとに、公共日本語教育において「専門性を開く」とは何を意味するのかを2つの観点から論じる。1つは、コミュニティへの参加者が、それぞれに「ことばの市民」（細川 2012）となり、コミュニティのコミュニケーションのあり方を主体的に考えるようになることである。もう1つは、コミュニティのメンバーがそれぞれの専門性を生かしながら協働するプロセスで、それぞれの専門性が互いに更新され、そのコミュニティで実践する日本語教育の理念と実践が更新されていくことである。

2. 公共日本語教育

1. で「親子 de 国際交流」は公共日本語教育だと述べたが、ここでは公共日本語教育とは何かを確認する。公共日本語教育の意味について言及するには、「公共性」とは何を確認しておく必要がある。齋藤（2000）は、「価値の複数性を条件とし、共通の世界にそれぞれの仕方に関心をいだく人びとの間に生成する言説の空間」（p.6）を公共性と定義する。また、齋藤（2008）は、「公共圏」と「親密圏」の相違点を示す論述の中で、「親密圏には公共性の条件である「無限の複数性」は望むべくもなく、またそこでは「共通の世界」—それは人々を結びつけると同時に切り離す—をめぐる意見の交換が自在に行われるわけでもない」（p.116）と、公共性の条件について述べている。筆者らは、この齋藤の議論に基づき、公共性を、開かれた空間で多様な価値観や背景を持つ複数の個人が自由に意見や考えを表明し、交換できる状態と捉える（福村・三代 2021）。

一方、細川（2016）は、日本語教育の専門性が閉ざされることで、日本語教育が社会に開かれたものにならないと警鐘を鳴らす。細川（2012）は、日本語教育の担い手を日本語教育の専門家に限定するのではなく、社会の一人ひとりが、「ことばによって自律的に考え、他者との対話を通して、社会を形成していく個人」（p.261）となる必要があると主張し、それを「ことばの市民」と呼んだ。細川にとって、公共日本語教育とは、一人ひとりが「ことばの市民」となることを促進するような教育実践であると言える。しかし、細川が提示する教育実践は、個人が自律的なことばの担い手になることに特化し、コミュニティ、あるいは社会とどう関わるかという点については十分に議論されていない（福村・三代 2021）。そこで、福村・三代（2021）では、上述の、開かれ、多様な価値観が交差する場としての公共性を重視した、コミュニティの実践として公共日本語教育を以下のように再定義した。

多様な参加者に開かれ、その参加者間の権力関係は固定化されず、対等な関係において、ある特定の課題を共有し、解決に向かっていく過程でコミュニケーションを学び合う実践 (p.105)

では、このような公共日本語教育において、その専門性を開くとはどういうことか。細川は、一人ひとりが、自律的なことばで思考し、他者と対話し、社会を構成することを「ことばの市民」と呼び、「ことばの市民」こそが開かれた日本語教育の専門性の担い手であると論じる。この議論を個人ではなくコミュニティという文脈で考えるならば、そこに参加したそれぞれが「ことばの市民」として、そのコミュニティにおけるコミュニケーションのより良いあり方について思考するというのが、公共日本語教育の専門性を開くことだと考えられる。すなわち、一人ひとりが、コミュニティのことばをつくりだす「ことばの市民」になるということである。

本稿では、【官】の立場である公民館スタッフの森によるプロジェクトを通じた気づきから、「ことばの市民」になる契機を得たことを示し、公共日本語教育において専門性を開くとは何かについてその具体例を示す。同時に、森の気づきは、専門性を開くことのもう1つの意味の可能性を筆者らに提示した。それは、森の持つ公民館の専門性と筆者らの持つ日本語教育の専門性が相互に影響し合い、森と筆者らが学び合うことで、それぞれがその専門性を更新したことである。このことは、公共日本語教育において専門性を開くとは、参加者のそれぞれの専門性を持ち込むことで新しい専門性が生まれてくることも意味する。つまり、専門性を開くには、公共日本語教育の実践の中で専門性が常に更新されていくという意味、すなわち専門性自体が変化へと開かれているという意味も含意されると捉えることができる。

3. 「親子 de 国際交流」

福村は、2010年に日野市で、地域日本語教育の一環としてあいあいを立ち上げた。あいあいは、日本人親子を含むさまざまな国や地域につながりを持つ親子の交流を目的としている。センターは、日野市内の子育て支援を業務としており、子育て支援を目的とする団体の運営をサポートしている。ムサビを交えた官学民連携プロジェクトが開始される前から、センターとあいあいは連携をとり、年に2回、日野市周辺に暮らす親子を対象としたイベントを企画し、開催してきた。

三代は、ムサビで担当する上級日本語クラスの活動として本プロジェクトに携わっている。2016年よりムサビの学生が中心となって、イベント「親子 de 国際交流」の企画・運営を担当してきた。当該クラスは、学部生を対象として開講されており、留学生に関しては、日本語能力試験N1以上を目安としている。ただし、取得は条件になっていないため、学生の判断で履修可能となっている。クラスの目標は、学生がイベントの企画、運営を通して、企画書の作成、プレゼンテーション、プロジェクトワークでの協働など、社会で使用するコミュニケーションを総合的に学ぶことである。また、留学生と日本人との共修授業となっており、多文化を背景とした人々と一緒に、共に生きる社会のあり方を考えることで、多文化におけるコミュニケーションのあり方を経験的に学ぶことも期待されている (福村・三代 2021)。

「親子 de 国際交流」の開催を目的とした本プロジェクトは、2016年度から継続しているが、本プロジェクトの実践は公共日本語教育の理念に立脚している。その理念とは、「日本語を教える／教えられるという関係性を超え、多様な立場の参加者が協力し、地域のイベントを開催することを通じて相互に学び合いながら、「ことばの市民」(細川 2012) として共に成長すること」(福村・三代 2021, p.103) である。この理念に共鳴し、筆者らは、センターのスタッフ、学生、あいあい

のメンバーを対等な場の担い手として捉えた。そして、主にイベントの企画においてそれぞれの意見を自由に出し合い、異なる立場から多様な視点が混在する状況を貴重な状況として考え、実践してきた。

2021年度の「親子 de 国際交流」は、前述のとおり新型コロナウイルスの影響からオンラインでのイベント開催となった。企画の準備もオンラインを中心に行った。「親子 de 国際交流」を企画する授業は、前期に設定されており、4月から7月までの4ヶ月間にわたって、学生はプロジェクトに参加することとなる。参加した学生は10名（インドネシア1名、韓国4名、中国2名、日本3名）であった。上級日本語クラスの概要は以下の通りである（表1）。（*は、センター、公民館、あいあい、クラブのメンバーが参加した回）

表1 ムサビ上級日本語クラスの概要

週	内 容	週	内 容
1	オリエンテーション	10	リハーサル*
2	プロジェクトメンバー顔合わせ*	11	リハーサルのふりかえり*
3-4	イベントの企画		課外：イベント開催*
5	企画のプレゼンテーション*	12	クラス全体でのふりかえり
6-9	イベントの準備	13	個人でのふりかえり

プロジェクトは次の3つのフェーズに分けられる。

- (1)企画の決定
- (2)イベントの準備
- (3)イベントの開催とふりかえり

学生がイベントの企画案をつくるには、日野市の外国につながる親子や、市民の生活を支援する人たちのことを知る必要があり、学生を含むプロジェクトメンバーの顔合わせをオンラインで行った。事前に、あいあいのメンバーの出自国である台湾のお茶の葉と、チュニジアのデーツ（ナツメヤシ）を、学生、センターと公民館のスタッフ、クラブのメンバーに送付しておき、顔合わせの際に一緒に飲んだり食べたりし、簡単なゲームをして交流した。打ち合わせやイベント自体もオンラインで行うため、直接対面で会うことのないメンバーが、せめて同じ時間に同じものを共有して飲んで食べて、つながりを持ってほしいという筆者らの思いがあった。顔合わせでは、まず、イベントの趣旨として、福村よりあいあいの設立目的と過去のイベントの紹介などが行われた。オンライン開催ではあるが、参加者がつながりを感じられるイベントをめざすことが確認された。次に、学生にイベントを企画する際のヒントを与えられるように、あいあいのメンバーである外国人が、子育てを含めた日本での生活について語った。また、自身がつくった自国の料理を、画面を通して見せながら紹介した。

イベントの企画は、3つのチームに学生がわかれ、それぞれがプレゼンテーションし、それを日野市のメンバーが評価することで決定される。プレゼンテーションの結果、ペットボトルで水族館をつくる活動に決まった。ペットボトルに海の絵を書き、青い絵の具を溶いた水を入れることで水族館に見立てるというものであった。最後に部屋を暗くし、携帯電話のライトで照らすことで青い

ランプのように輝くというものである。コミュニケーションを取りながら、同じものを制作していく過程で、そして最後に1つの画面で写真をとることで少しでもつながりが感じられるのではないかという企画であった。また、ペットボトルという廃材を使用することで、環境問題への意識化も意図されていた。実際にペットボトルで制作したものを提示するなどプレゼンテーションの質の高さと、日野市がSDGs（持続可能な開発目標）に力を入れているために環境問題を意識していることが評価され採択された。

イベントの準備段階では、プロジェクトを進めるにあたり、コミュニケーションを円滑にするために、対面で会いたいという意見が学生から出たことで、7週目と9週目は対面授業とした。当時、ムサビは、実技科目は対面授業、講義科目はオンライン授業という体制で、学生はキャンパス内にはいるという状況であったため、部分的な対面授業への移行が可能であった。プロジェクト後のふりかえりでは、対面の会があることで、グループでの協働ですれ違いが解消され、連携がうまくいくようになったという学生が多かった。リハーサルとそのふりかえりには、日野市のメンバーも参加し、司会進行やファシリテートの仕方など適宜アドバイスを行った。

イベントには、18家族（6か国）が参加した。学生たちは、4つのグループにわかれ、それぞれのグループのファシリテーターを務めた。またサポーターとして各グループにセンター、公民館、あいあい、クラブのプロジェクトのメンバーも入り、適宜、学生の進行をサポートした。イベントの評価は概ね良好で、参加者は水族館づくりを楽しんでいた。電気を消してライトアップした場面では歓声が起こり、「本物のお魚が泳いでいるみたい!」という子どもの声が響いた。

ふりかえりは、クラス全体で行ったのちに、それを踏まえて、個人で行うという形にした。学生たちは、達成感を覚えることができ満足度が高かった一方、イベント当日の自分たちのコミュニケーションには大きな課題が残ったと感じていた。プロジェクトのメンバーが助けてくれたから乗り切ることができたが自分たちだけでは難しかったと反省する学生が多くいた。しかし、多国籍の親子が参加し、参加者の日本語能力も当日までわからない状況でのファシリテーションは、とても高度なコミュニケーション能力が要求される。うまくできなかったという反省も貴重な学びであることと、プロジェクトのメンバーと一緒にだからこそ乗り越えられたという経験の価値をクラスで確認してプロジェクトは終了した。

一方、ムサビの学生たちがイベントを企画、開催することに並行して、公民館のスタッフの森は、さまざまな形でイベントの準備や運営を支える役割を担った。森の具体的な役割は次の通りである。

- (1) 官学民プロジェクトのメンバーによる事前ミーティングへの参加
- (2) クラブへの協力要請
- (3) ムサビの授業への参加
- (4) 広報活動⁴⁾ および参加応募者の管理
- (5) イベント当日の学生に対するサポート

(1) の事前ミーティングは、2021年3月12日に行われた。森は、本ミーティングに参加し、まず、過去の「親子 de 国際交流」の開催状況について以前から参加しているメンバーより説明を受け、公民館の役割について確認することになった。事前ミーティング開催時には、まだクラブはプロジェクトに正式に参加していなかった。本ミーティングでの重要な議題の一つは、初めてのオン

ライン開催についてであった。森は公民館のオンライン対応を任されており、公民館の行事におけるオンライン状況についてほかのメンバーに説明した。また、公民館を活動拠点とするクラブへの協力要請を担当することになった。そして、上述のように定期的にムサビの授業に参加し、あいあいのメンバーとムサビの学生の交流会に出席したり、学生の企画に対してコメントしたりする形で関わった。同時に、市民へのイベント参加を呼びかける広報活動の中心を担い、参加応募者の管理も担当した。イベント当日も一つのグループに入り、ファシリテーター役の学生をサポートした。

以上のようなプロジェクトへの参加を通して、森は、国際交流を自分自身も経験していたと言える。4. では、その森の経験が、森自身にどのような気づきをもたらしたのかを考察する。

4. 公民館によるプロジェクトへの参加

4.1. 調査と分析の手続き

本プロジェクト終了後、センターのスタッフ2名、三代、福村、森、クラブの日本語ボランティア1名がふりかえりを行った。また、森に2回インタビュー調査を行った。1回目のインタビュー調査では、本プロジェクトに関わるようになったきっかけは何か、実際に連携プロジェクトを通して多様な人たちと協働する中でどのようなことに気づいたのか、イベントに参加してどう感じたか、などについて質問した。筆者らは、1回目のインタビュー調査による音声データを繰り返し聞き、さらに詳細について確認したいことを整理して2回目のインタビュー調査を行った。インタビュー調査1回のみを分析の対象とせず、2回インタビュー調査を実施することは、分析の妥当性を高めるためにも必要であった。また、解釈が恣意的に陥らないように、分析は福村と三代の両者で行った。ふりかえりとインタビュー調査は録音し、文字化して研究対象のデータとした。以下は、調査の概要である（表2）。なお、データ取得前に、センターのスタッフ2名、森、クラブの日本語ボランティア1名に調査の目的と倫理的配慮を説明した上で、調査およびデータの取り扱いについての詳細を示し、調査協力についての同意書にサインをもらった。

表2 調査の概要

データ	データ取得日	時間	参加者
A ふりかえり	2021年7月15日	75分	福村・三代 センターのスタッフ2名・森・クラブの日本語ボランティア1名
B インタビュー(1)	2021年8月24日	43分	福村（インタビュアー）・森
C インタビュー(2)	2021年9月29日	44分	福村・三代（インタビュアー）・森

本章では、上記データから、森が本プロジェクトを通してどのようなことに気づいたかを分析する。分析方法は、佐藤（2008）の「定性的コーディング」を援用した。「定性的コーディング」は、データをセグメント化（切片化）し、類似するセグメントをグループにわけ、抽象度を上げて精緻化を繰り返し、グループにカテゴリー名をつけて最後に再文脈化するという分析のプロセスをたどる。本稿では、〈1〉データから森の「気づき」に関わる語りの部分をセグメント化する、〈2〉内容が似ているセグメントを3つのグループにわけ、〈3〉各グループにカテゴリー名（①外国人住民にとっての日本語と日本語教育について、②地域のイベント主催者としての役割について、③生涯学習の提供者としての役割について）を付す、という流れで行った。

4.2. プロジェクトへの参加により森が得た気づき

本節では、森の気づきについての分析結果について、データを引用しながら示す。なお、表2に示したデータのA、B、Cのうちどれを引用したかを（ ）内に示す。森は、本プロジェクトに参加する以前クラブの運営サポートに関わる業務はしていたが、国際交流に対しての興味は「そんなになかった、特に」(B)と述べた。2021年は配属後2年目で、初めて国際交流を目的とする官学民連携プロジェクトに関わった森には、大きな気づきが3つあった。

①外国人住民にとっての日本語と日本語教育について

森は、「親子 de 国際交流」の広報活動を遂行する過程で、日本語を自在に操れない外国人住民とのコミュニケーションの仕方について学んだと語り、伝わる日本語を用いることの大切さに気づいていた。

参加者募集の段階で応募者に対する参加前アンケートを作成する役割を森が担っていたが、福村が森によるアンケート上の質問の表現について、複数項目の修正を依頼したことがあった。以下の表は、森が福村の依頼に応じた、参加前アンケート文面の修正例である(表3)。

表3 参加前アンケートの修正例

修正前	修正後
参加するお子さんは何歳ですか	こどもは なんさいですか
あなたの出身国はどちらですか	あなたのくには どこですか
何語を話すことができますか	どのことばを はなしますか (えいご? ちゅうごくご?)

福村が森に修正依頼をした理由は、日本語を自在に操れない外国人には漢字と漢字熟語や丁寧な表現を理解することが難しいこと、語句の区切りがわかりにくいこと、「何語」のように疑問詞を含む漢字熟語は理解しにくいこと等である。そこで、森には、分かち書きのひらがな表記とシンプルな表現を求めた。また、「郵便番号」「電話番号」の入力を求める項目もあったが、記号やアイコン(「〒」「☎」)を使うことを提案した。このことについて森は、以下のように語った。

日本語教育に全く関わらなかった立場ですから、そういった配慮というか、この言い方はこういう言い方ができて、この表現だったら外国籍の方により伝わりやすい言葉があるということを学ばせていただきました。(B)

また、日本語表記に対する異なる視点の重要性について、次のようにも述べた。

表現が硬くなってしまうとき、自分ではない誰かの視点、福村さんの視点で「ここは易しくした方がわかりやすいよ」と言っていただけのはありがたかったですし、自分一人でアンケートを作るっていうのは結構不安でした。(B)

以上から、森は、「親子 de 国際交流」の広報活動を通して、伝わる日本語の表現をするという配慮の大切さに気づき、日本語を自在に操れない外国人とのコミュニケーションについて学んだと言える。さらに、森は、本プロジェクトで外国人の声に耳を傾ける中で、彼らが抱える不安について

知ることになり、彼らの声に傾聴し、彼らの不安をすくい取って解消する日本語教育の存在意義に気づいた。その気づきは、「親子 de 国際交流」のプレ企画として、プロジェクトメンバーがオンライン上で集まった顔合わせの回がきっかけとなった。あいあいの外国人メンバーの一人が、自己紹介をし、自身が来日したばかりで妊娠、出産という初めての経験を迎え、言葉と文化の壁の前で戸惑い、孤立したというエピソードを語ったからである。森自身は日本語を教える立場に立ったことはなく、クラブのサポートをするものの日本語教育の直接的な担い手ではない。森は、顔合わせの際のあいあいの外国人メンバーによる日本での生活の話を思い出し、次のように語った。

どうしても定住しなければならない、その中に自分以外の人たちに自分の言葉が通じにくい、自分の母語が相手にとっての母語ではないという点で、不安なこともきっとあったらと思ういます。それがプレ企画（顔合わせ）から十分読み取れました。そういった方々の不安を少しでもやわらげるために、日本語教育というものは存在しているのかなと思います。(B)

本プロジェクトへの参加を通して、森は、社会にコミットできていない外国人の存在を直接知った。そして、そのような外国人を包摂する地域社会の重要性を感じた。つまり、インクルーシブな地域社会を実現するための日本語教育の存在意義に気づき、自身がそのバックアップをする役割を担っていることを認識したのである。

②地域のイベント主催者としての役割について

森は、本プロジェクトの業務を進める中で直接外国人住民とやりとりし、彼らの孤立に対する問題意識を強めていった。そして、地域の外国人が人的ネットワークを構築する困難さに気づくとともに地域のイベントを主催することの意義を見出していた。

コロナ禍で対面式の日本語教室が実施できず、オンライン授業の操作の煩雑さからクラブで活躍していた高齢のボランティアが次々に辞めていき、日本語学習者も減少していった。このような現状について、森は以下のように述べた。

横のつながり、同じ外国籍の方同士の交流が以前と比べて少なくなっている気がして、それに合わせて外国籍の、ほかの近所に住んでいる日本の方々とも交流があるのかなってというのは心配です。(B)

また、顔合わせの時にあいあいのメンバーが渡日したばかりの苦勞を語ったことを思い出し、直接外国人住民の声を聞き、その人が地域で孤立していたという事実について、「口からだけの言葉で、内側で（外国人のことを）想像して普通に暮らしてちゃ、たぶん聞けないことでしたので、いい経験になりました」(C) と語った。そして、イベント当日をふりかえり、以下のようにも述べた。

参加者同士の交流というものが少なかった。出会った親子同士、同じような悩みを持っていたりとか、同じ世代の子供を育てている人同士は通じ合うものがきっとある。イベントでつながりをつくり、その後より大きな輪に広がって行けるような側面が、イベントにあってもよかったかなと思います。学びを通してつながりができるというのが公民館として一緒に参加させていただいている意味なので。(B)

上記の語りには、今後の課題とともに、公民館が本プロジェクトに参加する意義も含まれている。森にとっての「つながり」とは、「今まであんまり話さなかった近所の方と親しくなっていく。近所の方とかだったら非常時に助け合ったりとか」(C) というネットワークを意味する。これらの語りは、クラブの日本語学習者の人的ネットワークの弱まりについての懸念と再構築への期待である。

また、森は、「親子 de 国際交流」に、主催者と参加者が双方向に関わり、体験の共有を楽しめる交流型イベントの意義を見出していた。森が普段手がける生涯学習は、講師が講演するスタイルのことが多い。しかし、「親子 de 国際交流」は、公民館が招待した講師にスポットライトが当たる講義型のイベントではない。顔合わせでは、ムサビ、センター、クラブ、あいあいのメンバーとともにオンライン上で同じお茶とお菓子を共有して交流し、視覚と味覚を同期的に楽しんだ。イベント開催前から複数の担い手が段階的に協働し、本番では森も活動に入り込んでゲームに参加したり、参加者と会話しながらペットボトルの水族館づくりを楽しんだりした。森は、「双方向のイベントってというのは初めて。(略) 9割方、私、参加者の目線で楽しんじゃってたかな。すごく楽しかったです。一緒にやりましょう、わいわい楽しみながらやりましょうっていうイベントは初めてです」(A)、「座学ということは大事なんですが、それとほぼ同じか、ちょっと上ぐらいに体験、自分から出て行って、実際そのものを感じてみることも非常に大事なものではないかと思います」(A) と述べた。森自身がイベントに参加者の視点で参加したことで、主催者と参加者双方が体験の共有を楽しめる交流型イベントの意義を見出せたと言える。それは、「学びを通したつながりをつくるっていうのは、日野市の公民館の理念でもありますので、そういった意味で、このイベントには意義を見出しています」(C) という言及からもわかる。さらに、森は、本プロジェクトへの参加をステップとして、「地域の人との交流、つながりをもてるような企画や講座も展開していきたい」(C)、「(海外の) 現地の人と Zoom でつないで、実際に現地の紹介とかできたらなって思っています」(C) と、自身のこれからの業務についても展望している。森は、外国人住民の孤立の問題を自分が解決すべき問題として捉えるとともに、地域のイベント主催者の役割として、外国人住民を含めた地域の人たちと同じ目線でイベントに参加するという役割の重要性に気づいていたのである。

③生涯学習の提供者としての役割について

森が公民館に配属されたのは、もともと教育や文化に関心を持っており、生涯学習に関わる職種を希望したからである。森は、公民館の役割について、以下のように述べた。

市民の方々の学びたい、教えたいという背中をぽんっと押してあげる。我々が一方的に提供するのではなくて、それをきっかけとした人と人のつながりづくり、それが私たちの役割ではないかと思います。(B)

また、森は、インタビュー(1)でも(2)でも、地域住民に対する生涯学習の提供という公民館の役割について繰り返し述べていた。「親子 de 国際交流」を生涯学習の一つと捉えるのかどうかについては、「基本的に(生涯学習だと)捉えております」(C) と答えた上で、日本人と外国人がイベントを媒介して出会い、互いを知ることについて、「やっぱり(「親子 de 国際交流」は)生涯学習の一

環かな」(C)と語った。森は、それまで存在を知らなかった他者を知ることが、すなわち学びであると考えている。明確に本イベントを生涯学習と同定しないにしても、「親子 de 国際交流」を参加者の出会いと学びの場だと捉えているのである。そして、今後の展望について、「つくり手も学べるような、新しいことが気づけるような講座づくりができれば。(略) つくり手も何かを得られるようなイベント、講座ができればいいなと思っている」(C)と述べ、イベントや講座が、場の担い手を含めた互恵的な学びの場であると考えている。また、イベントや講座の担い手にとって大切なことは、「当事者視点に立って講座をつくる」(C)ことだとも述べている。本プロジェクトは、異なる立場の5者が、「親子 de 国際交流」の開催を共通の課題とし、それぞれが対等な担い手として協働した。森は、この協働を通して、自分と異なる立場の視点を持つことの重要性に気づき、「親子 de 国際交流」を多様な立場の参加者の互恵的な学習の場と位置づけ、自身の生涯学習の提供者としての役割に改めて気づいたと言える。

5. 日本語教育の専門性を開くことの2つの意味

5.1. 森がプロジェクトに参加した意味

ここでは、4. で述べた森の3つの気づきを手がかりに、森が本プロジェクトに参加したことにはどのような意味があったのかについて検討する。その上で、公共日本語教育における日本語教育の専門性を開くとは何かについて論じる。

1つ目の気づき「外国人住民にとっての日本語と日本語教育について」は、森の本プロジェクトへの参加が、日本語教育と連携して、外国人がコミットしやすいインクルーシブな地域社会の実現に貢献できることを意味している。なぜなら、森は、外国人住民に伝わりやすいことばの使い方についての気づきを通して彼らの隣人としてのコミュニケーションのあり方を学んだり、地域日本語教育の存在意義について認識したりしたからである。

また、2つ目の気づき「地域のイベント主催者としての役割について」は、森が本プロジェクトへの参加を通じて、市民にサービスを提供する公民館のスタッフの枠を超え、森自身も市民の一人に位置づけられたことを意味する。同時に、本プロジェクトがイベント開催という共通の課題をめぐって協働するコミュニティを形成し、森がコミュニティの一員として存在していたことも意味する。なぜなら、この気づきには、森がトップダウンの救済の形ではなく外国人住民と同じ目線で、協働相手とともに問題を解決しようとしている態度や姿勢があらわれているからである。森は、外国人住民のコミュニケーションの問題に対峙する地域日本語教育に関わる筆者らと連携して問題解決にあたっていた。外国人住民のコミュニケーションの問題に直面し、彼らが孤立や不安からどうすれば脱することができるのか考えながら、学生のイベント案にコメントを出したり、広報の業務に従事したりしていたのである。森が外国人住民を含めた市民と同じ目線で参加し、共に楽しもうとしていた態度や姿勢からも、その自覚はうかがえた。

3つ目の気づき「生涯学習の提供者としての役割について」は、森の本プロジェクトの参加によって、イベントの意義が更新されたことを意味している。なぜなら、森は、「親子 de 国際交流」を「基本的には生涯学習の一環」と捉えているからである。本イベントは、森の視点により、外国人を含めた地域住民に対し平等に学びの機会が保障される場として捉え直されている。つまり、普段出会わない人たちが出会い、学び合える「生涯学習」の条件を充たす場としての側面が加えられているのである。そのように考えると、市民に対する生涯学習の機会を保障する役割は、公民館のみではなく、筆者らのような日本語教育に携わる者にも担えるということになる。本イベントは、

筆者らの呼びかけによって地域日本語教育の一つの実践として始められたが、生涯学習の意義も帯びてきていると言える。

5.2. 日本語教育の専門性を開くとは

それでは、公共日本語教育における日本語教育の専門性を開くとは、何を意味するのだろうか。ここでは、2つの観点から考えていく。

観点の1つは、本プロジェクトを1つのコミュニティと捉え、プロジェクトの担い手それぞれが「ことばの市民」に成長できることが、公共日本語教育の専門性を開くことである、という観点である。3. で述べたように、筆者らは、「親子 de 国際交流」を公共日本語教育の理念に立脚して実践してきた。実践のねらいは、「日本語を教える／教えられるという関係性を超え、多様な立場の参加者が協力し、地域のイベントを開催することを通じて相互に学び合いながら、「ことばの市民」(細川 2012) として共に成長すること」(福村・三代 2021, p.103) である。【官】の公民館およびセンター、【学】のムサビ、【民】のあいあいおよびクラブは、共にイベント開催を共通の課題とするコミュニティの参加者であった。このコミュニティにおいて、5者それぞれは、「親子 de 国際交流」で、ムサビの学生と地域の親子を含む参加者全員によるコミュニケーションが活性化できるように共に準備を進め、本番で尽力した。森も、ことばの活動を通してコミュニティの一員であることを自覚し、「ことばの市民」(細川 2012) として成長したと言える。なぜなら、外国人住民の孤立や不安に寄り添ったり、市民と同じ目線でイベントに参加したり、外国人住民の隣人としてのコミュニケーションのあり方を学んだりしたことは、コミュニティの一員として共通の目標をめざす「ことばの市民」になるプロセスだったからである。

筆者らも森と同様、「ことばの市民」として成長していたと言える。なぜなら、本プロジェクトが連携プロジェクトとして成り立ったのは、プロジェクトのメンバーの誰かをリーダー役に固定せず、担い手それぞれが「ことばの市民」として対等に課題解決に向けて働いていたからである。仮に筆者らが「親子 de 国際交流」を日本語教育の実践としてしか捉えず、日本語教育に携わる者だけがその専門性を発揮するという考えに陥れば、日本語教育の専門性を専売特許として専門家集団の中に閉じ込めることになる。しかし、筆者らは公共日本語教育の専門性を開くことを選び、森と共にコミュニケーションのあり方を主体的に考えるようになったのである。

もう1つの観点は、コミュニティのメンバーがそれぞれの専門性を生かしながら協働するプロセスで、そのコミュニティの日本語教育の理念と実践が更新され、それぞれの専門性も更新されていくことが、公共日本語教育の専門性を開くことである、という観点である。

筆者らは、日本語教育に普段従事していない森にその実践の意義を理解してもらった。しかし、逆に、地域日本語教育の実践として設計したはずの「親子 de 国際交流」は、森がめざす生涯学習の側面を持ち合わせていった。このことから、イベント開催という共通の課題に向かう協働のプロセスで、公民館スタッフの森と公共日本語教育に携わる筆者らは、互いに専門性を生かしながら影響し合っていたと言える。つまり、公民館と日本語教育の2つの専門性が相互に影響を及ぼし、森と筆者らの専門性が互いに更新され、理念と実践も更新された新しい形の日本語教育をつくっていったのである(図2)。

春原(2017)は、「多様な住民がカズイスティック、臨機応変に主導権を共有し、複数の中心をもつことで、日常的にリスクを回避し、変化に対応していけるのが、多様性に開かれた地域であろう」(p.7)と述べている。コミュニティには色々な人が存在し、それぞれの興味関心、得意なこと

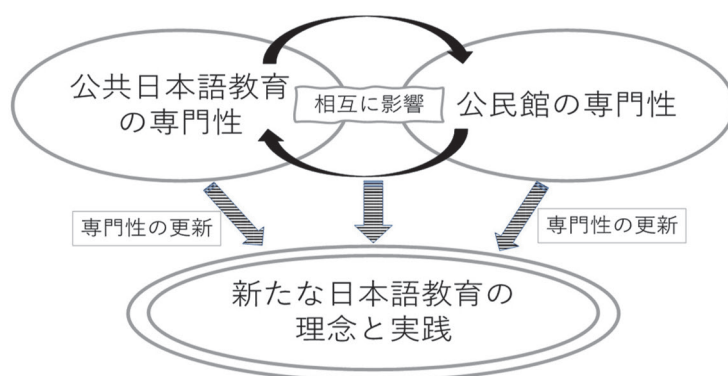


図2 影響し合う専門性

は異なる。日々の問題解決は、誰か一人のリーダーが常に行うのではなく、問題に応じて解決できる人にイニシアチブのバトンを渡し、そしてバトンはコミュニティ内で循環させることが大切である。そのように、さまざまな問題に臨機応変に対応できるコミュニティが多様性をうまく活用していると言える。また、春原（前掲）は、「色々な人がいてもいいというのと、色々な人がいたほうが良いというのとでは、まったく社会のあり方が違う。異質な者を条件つきで許可するのか、多様な人を必要とするのか、という根本的な相違である」（pp.7-8）と述べる。この議論上の色々な人がいたほうが良い社会とは、齋藤（2000）が公共性の条件として示す「価値の複数性」（p.6）と齋藤（2008）が公共圏の条件として示す「無限の複数性」（p.116）が存在する社会だと言える。公共日本語教育も当然複数性を条件としているが、そこで「専門性」の存在のみが尊重されれば、複数性と専門性が矛盾する。だからこそ、専門性は協働相手に開かれなければならないし、協働相手それぞれの専門性が影響し合わねばならない。

その意味で、筆者らの専門性がどのように更新されたかについて分析を深め、より明確に記述しなければならない。そして、今後、「親子 de 国際交流」を企画、運営する官学民プロジェクトでは、センター、公民館、ムサビ、あいあい、クラブの5者それぞれの専門性が開かれ、共有されるように連携を強めていきたい。

謝辞

本研究は日本学術振興会学術研究助成基金助成金基盤研究（C）（課題番号 19K00745，研究代表者：福村真紀子）の助成を受けて行われた。

注

- 1) 館岡・小畑（2021）は、日本語教師の専門性を「自身の日本語教育観（理念）を明確にしつつ、自身の関わるフィールドがどんなフィールドなのかを適切に評価し、理念とフィールドの間で適切な方法を編成していくこと」（p.153）だと定義している。本稿でも日本語教師の専門性については、この定義に依拠する。
- 2) 生涯学習は、「一般的には、人々が行うあらゆる学習、すなわち、学校教育、社会教育、文化活動、スポーツ活動、レクリエーション活動、ボランティア活動、企業内教育、趣味など様々な場や機会において行う学習の意味で用いられます」と説明される。（文部科学省平成18年版文部科学白書第2部第1章第1節1.「生涯学習の意義」：文部科学省ホームページ https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab200601/002/001/003.htm（2021年10月7日最終閲覧））。
- 3) 日野市ホームページ <https://www.city.hino.lg.jp/kouminkan/1015469/1016849.html>（2021年10月5日最終閲覧）
- 4) 広報の方法は、紙の市報のほか、日野市のLINE公式アカウントを利用した。

引用文献

- 福村真紀子・三代純平 (2021) 「公共日本語教育のための実践研究:官学民による「親子 de 国際交流」プロジェクト」
東京外国語大学国際日本学研究, 1, 103-118.
- 春原憲一郎 (2017) 「コミュニティの多様性を支える言語の役割とは何か」社会言語科学, 19 (2), 3-9.
- 細川英雄 (2012) 『ことばの市民になる:言語文化教育学の思想と実践』ココ出版.
- 細川英雄 (2016) 「公共日本語教育という思想へ:早稲田日研のこれまでとこれから」早稲田日本語教育学, 20, 21-31.
- 細川英雄・牛窪隆太・三代純平・市嶋典子 (2017) 「日本語教育における公共性の意味と課題」2017 年度日本語教育学会秋季大会予稿集, 43-52.
- 齋藤純一 (2000) 『公共性』岩波書店.
- 齋藤純一 (2008) 『政治と複数性:民主的な公共性にむけて』岩波書店.
- 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法:原理・方法・実践』新曜社.
- 館岡洋子・小畑美奈恵 (2021) 「「三位一体ワークショップ」の提案:省察を促す学びの場づくり」『日本語教師の専門性を考える』ココ出版, 141-154.